

2018 年度競技規則修改正・明確化 理解度テスト

正しいものに○、正しい数字、間違っているものに×を記入しなさい。

1. 全天候トラックの競技場で行われる大会で、個人所有のスターティング・ブロックを使用したいと持込みがあった。検査の上、使用を認めた。 []
2. 4×400mR のスタートで、スターティング・ブロックのフレーム後部が外側のレーンにはみ出てセットされていた。他の競技者のスタートの邪魔になっていなかったなので、そのままスタートさせた。 []
3. スターティング・ブロックのフレームがスタートラインよりも前に出ていたが、フット・プレートはラインより後ろだったので、そのままスタートさせた。 []
4. 一旦、リレーのオーダー用紙が提出された後、差替えを求めてきた。締切り時間前だったので、差替えを認めた。 []
5. リレーのオーダー用紙提出締切り後、メンバーの一人がケガをしたとして、主催者が任命した医師の診断書を付してメンバー変更の申し出とオーダー用紙の再提出があった。新しいオーダー用紙では最初のオーダー（走る順）とは異なるオーダーになっていたが、これを認めて受理した。 []
6. 円盤投で、選手が回転動作に入った際、片足がサークルの外側の両脇の白線後部の地面に触れた後、投てきを行った。外に出た足で踏ん張ってはいなかったなので、有効試技とした。 []
7. 投てき競技の計測に光波測定機を使用する際、競技前・後の動作確認（距離の正確性の確認）をグラス・ファイバー製の巻尺を使って計測値の確認を行なった。 []
8. 屋外で行う 4×100mR は、テイク・オーバーゾーンの長さが 30m になった。 []
9. 4×100mR で第 3 走者がテイク・オーバーゾーンの入口の線よりも外側（進行方向手前）で待機していた。バトンの受渡し時に、その位置からスタートしたので黄旗を挙げた。 []
10. 走高跳で、各競技者の最初の試技の制限時間は 30 秒になった。 []
11. 単独種目の棒高跳で優勝を決めて競技者が一人となり、大会記録に挑戦することになった。制限時間は何分か。 [分]

12. 走高跳で優勝を決めて競技者が一人となった。日本選手権の標準記録（大会記録より低い高さ）までバーを上げて挑戦することにしたので、制限時間を1分長くした。 []
13. 走幅跳の選手が競技エリア内に携帯用酸素ボンベを持ち込んでいたので、助力行為にあたるとして競技中の使用を禁止した。 []
14. 夏の大会で砲丸投を行っている際、コーチ席から選手に帽子を渡したいと申し出があった。審判長は助力にはならないとしてこれを認めた。 []
15. 審判長がやり直しを命じたレースの最初の記録は、失格対象となった選手のものを除いて、有効なものとして記録申請ができる。 []
16. スタートの際に不適切行為があったとして、スタート審判長がイエローカードを提示した。スタート審判長はその情報を各審判長と記録情報処理員に伝えた。 []
17. フィールド審判員は一度判定を下したら、その判定を再考することはできない。 []
18. リレーのマーキングテープを2か所に貼っている選手がいたので、1枚にするように指導したが、聞き入れなかったので監察員が剥がした。 []